

アドバイザーに聞きました!



京都府北中部・兵庫県北部担当
松森アドバイザー

入会前に、面談で制度の内容などを詳しく説明する朝日奨学会のアドバイザー。申し込み者の疑問や悩みなどを親身になって答えてくれる心強い存在です。
今回は、京都府北中部・兵庫県北部を担当する松森アドバイザーに聞きました。

面談ではどのような話をしますか?

朝日奨学制度は、学校と仕事を両立させることが一番重要になります。面談では、生活面や仕事面の具体的な話をし、イメージを膨らましてもらえるように心がけています。

例えば生活面では、3月の新入研修会から始まり、梅雨の時期を経て、夏前までが一番大変な時期となります。そのころを乗り切ると生活のリズムがとれてくるので、まずその時期を頑張りたいと伝えていきます。そして特に、起床については、今から2時に起きてみることを勧めています。

仕事面では、一部の新聞が大切な商品であることを認識して、きちんと配達をすることが一番の義務となります。配達中、お客様に新聞を手渡しした時の「ご苦労様」と言っていたいた時のうれしさや、新聞を待つておられるお客様のこ

とを話すことで、仕事の責任について伝えていきます。面談の時の具体的な話の内容は、すべて実際に修了した先輩奨学生から聞かせてもらったことばかりなんです。

ほかにどのようなアドバイスをされますか?

まず一つは、一人暮らしへの憧れと、実際の生活の大変さについて伝えるようにしています。自分で食事を洗濯などをすべてやっていくというところは、憧れだけではできません。そして、親のありがたみを知って成長して欲しいと思います。

そして、新聞奨学生に限りますが、人生の中では「こんなはずじゃなかった」と思うことが必ずあります。そんな時、奨学生の皆さんには、申し込みをした時の目標や夢の実現を思い出し、原点に戻って乗り越えてほしいと思っています。自分をみつめ直すこと、プラス思考の大事さをアドバイスしています。

そして、とても大事なことです。奨学生生活の中に楽しいことがたくさんあるということを伝えさせてもらっています。先輩も、時間の制約の中で、学校の友達にも理解してもらい、

勉強と仕事と遊びも、めいっぱい楽しんでいきます。奨学生をやり遂げることで一番大切なことは何ですか? コミュニケーションをとること、良い人間関係を築くことが一番大切なことだと思います。奨学生をしていると、様々な人と出会い、人に助けられて、人のありがたみが分かります。また、様々な年齢の人との出会いが、視野を広げてくれます。

印象に残っている学生はいませんか?

申し込みをした時にすでに定員で締め切りとなっていたので、1年間アルバイトをしてお金をためて翌年再度申し込みをしてくれた学生や、高校の友達が奨学生として自立していることを知り、自分も申し込みをした学生など、一人ひとりが思いに残っています。

そんな皆さんの中で最も印象に残っているのは、修了式で「制度を利用して、間違いじゃなかったです。ありがとうございます」と言ってくれた学生です。毎日をきちんと積み重ねていくから、自然と出てきた言葉でした。本当にうれしくて、アドバイザー冥利に尽きます。

これから奨学生を目指す学生さんにメッセージをお願いします。

不安はあると思います。が、まず、第一歩を踏み出してみてください。始めてみると、自分の努力とともに、周りの方々からも、たくさん応援してもらえます。きっと、奨学生になって良かったと思えると思います。

第17回新聞配達に関するエッセーコンテスト

日本新聞協会が、新聞配達の日になんで募集した「新聞配達に関するエッセーコンテスト」の入選作から3編をご紹介します。

優秀賞

伊方壽子(51歳)
熊本県合志市

「経験が宝物に」

今から十二年前、ちょうど息子が小学校の卒業式を終えた時、「俺、四月から新聞配達するけん!」えっ? 突然の息子の言葉にただただ驚くばかり。「毎日配らなるとよ、出来ると?」「大丈夫、出来る!」そう言う息子に半信半疑ながら思い切ってやらせてみる事にした。

ところが始めてみると息子の頑張りはずごかった。中学校に入るまで野球部にも入部したので、試合の日はいつもより早く起きて配達に行った。雨の日も風の日も雪の日も。時には配達から帰って宿題をする事もあった。「この根性はどこからくるんだらうね?」。主人と二人してよく話したものだ。

ある夜、野球の練習で疲れている息子を見かねて「明日は少し遅く行くたい」、つい甘い言葉をかけたのである。ところが返ってきたのは「ダメ!毎日時間に待ってんなはるけん」。私はハッとしました。

と同時にとても恥ずかしかった。いつの間にか息子は自分の仕事として、一つの使命感を持ってやっていたのである。そんな息子も今では家庭を持ち、一児の父親だが、この貴重な経験は息子にとって一生の宝物になったに違いない。

入選

伊藤由衣(19歳)
三重県津市

「私の夢をかなえた兄の配達」

私の家は父子家庭で家事全般はいつも私の仕事でした。兄は学校の合間にアルバイトには行っているものの、いつも早く就寝、学校ギリギリに起床。なぜ自分だけがこんなに苦労しなければならないのだろうと思ひ、正直兄はあまり良い方ではありませんでした。ある晩、夜中に玄関の開く音がして目が覚めました。実は兄は私には何も言わず、五年間私の進学資金のために新聞配達のアルバイトをしてきていたのです。小さな自営業者である父の収入だけでは、二人の子供を大学に進学させることは経済的に困難でした。しかし私には看護師になりたいという夢が幼少のころからあったのです。

私が高校三年生の夏、兄は「お金のことは気にせず、自分の行きたい学校に行け」と言ってくれました。おかげで私は夢だった看護大学に無事合格し、夢への第一歩を踏み出すことが出来たのです。今では世界一の仲良し兄妹です。新聞配達で私達兄妹、そして家族のきずなをより一層強くしてくれました。

入選

尾花松五(45歳)
東京都世田谷区

「ニュースの足跡」

二十年以上も前。私は大受験に失敗し、新聞奨学生として予備校に通い始めた。配達は同じく浪人生となった販売所所長の息子から教わることに。既に何区域も配達をこなすベテランの彼に、私は慣れない道をフラフラしながら追いつくのがやっとだった。

私立大の受験日がピークとなる二月。奨学生の休日・争奪戦が始まり、同じ文系の彼とつくつか重なった。二校は朝夕刊とも休めたが、一校だけ休みがとれなかった。朝刊を早く始めれば試験に間に合うも、当日のホットニュースは無情にも「大雪!」。バイクでは無理なほど積もり、歩いて配るしかない。気持ちにはトインダウンするばかりだが、後ろで大きくなる足音。試験を数時間後に控えた彼が助けに来てくれたのだ。雪を刻む足跡は四つになり、手分けした配達は無事終了。「借りは受かって返せよ」と言われ、互いに会場に向かった。合格通知と、この日の夕刊は今も大切に保管している。

大阪朝日奨学会事務局 新年のあいさつ



大阪朝日奨学会事務局 局長 阿納 勉

あけましておめでとうございます

辛卯年正月を迎えました。新年ごとに、日本の首相が変わって、その都度、日本の存在価値、将来像が変化し、進む方向がますます不透明となつてきています。

世の中の発展は、唯物史観の考えと、精神的満足の際限との相関関係にもなってくるのでしょうか。いろんな意味で、転換期であり、難しい時代になつてきています。

物事を進めるためには、先を見据え、予測を立て、スピード感をもって、しかも試行錯誤を繰り返しながら、一歩でも先へ進めることができれば最高。

若人たちよ。元気、やる気、勇気の「気」を呼び起こし、アタックの年にしよう。

特に朝日奨学生の皆さんは、「夢」の実現に向けて、所期の道程を着実に進めますようお祈り申し上げます。年頭のあいさつに代えさせていただきます。

お知らせ

事務局員の担当地域は左記の通りです。

河野 大阪市

有田 大阪府(北部)

石川 大阪府(中部)

森田 大阪府(南部)

京都

広島

阪神、神戸

岡山、香川